

獣舎の**全魔獣**を管理する
私を解雇ですか？

それなら
自由に
旅します！

Fuji Yumiko

藤ゆみ子

illust. みみ助

・ CHARACTERS ・

ゼンデ

フィーナが出会った冒険者。
キュウ^{キュウビヨ}と契約する
A級テイマーで、
面倒見がいい。

テオ

グランディの使い魔。
いつも元気いっぱい、
明るいグリフォン。

グランディ

エルドラード国の
魔獣騎士団を率いる、
寡黙な団長。
責任感が強く、真面目。

大きい姿

小さい姿

ミリ

騎士団獣舎で暮らす
オオカミの魔獣。
勝気でしっかり者。

ミラーナ

魔獣騎士団の副団長。
凛々しくも茶目っ気のある
女騎士。

キュウ

フィーナの親友で、
並外れた力を持つドラゴン。
体の大きさを自在に
変えることができる。

フィーナ

騎士団獣舎で
働く落ちこぼれ聖女。
獣舎を追われたことを機に、
もふもふとの出会いを
求めて旅立つ。

プロローグ

「フィーナ・オルパス、あなたを解雇かいこいたしますわ」

突然じゅうしや獣舎に現れたアンジュ王女が、ボクたちの愛するフィーナにそう告げた。

「……え？ なんの話でしょうか？」

【な、なんだってー!!】

バイオレットの髪をなびかせ、王女様は鋭い目つきで彼女を睨にらんでいる。

【フィーナが解雇？】

【いったいどういうこと!!】

【フィーナがいなくなるなんてそんなの無理だよ!】

他の魔獣まじゅうたちも驚きのあまり声をあげている。

ここはエルドラード国の王宮内にある魔獣騎士団まじゅうきしだんの獣舎。

フィーナは、ボクたち魔獣のお世話をしてくれている掃除婦そうじふさんだ。

ブラウンのまっすぐな長い髪に、穏やかな瞳ひとみをした可愛らしい人。

とっても働き者で優しく、ボクたちをよく理解してくれる。

でも、この王女様は違う。今もみんなを睨みつけながら「ガウガウうるさい魔獣たちね」と言い

放った。

いつも意地悪してくるので、ボクたちの大嫌いな人だ。

解雇……。それは、フィーナがこの獣舎からいなくなるってこと。

アンジュ王女が戸惑うフィーナに向かって続ける。

「あら、詳しい説明が必要なのね。——出来損ないの聖女のくせにグランディ様に取り入って王宮に居座るなんて、みつともないってことよ」

「ですが、私は騎士様たちが留守の間、残った魔獣たちのお世話を頼まれていて……」

グランディは、ボクをタイムしたご主人様。魔獣騎士団の団長だ。

フィーナをとっても信頼している。

こんな話を聞いたら絶対に止めるはず。

といってもご主人様たち騎士は今、隣国との合同演習に出ていて、あと十日は帰ってこない。

【ねえテオ、どうするのよ】

隣の檻にいるオオカミの魔獣、ミリが声をかけてきた。

【ボクが怪我してなければ、すぐにご主人様を呼びに行くんだけど……】

【この女、みんながいけないときを狙ってきたのよ。ほんと意地が悪いんだから】
王女様を『この女』呼ばわりなんて口の悪い魔獣だ。

だけど、魔獣の言葉は人間には伝わらない。

テイマーは使い魔の言葉を理解できるが、王女様はそうではないからいいだろう。それにボクも

同感だ。

「私が新しい掃除婦を雇ったから、世話なら大丈夫よ。それに、このことはグランディ様も了承済みな。あなたはもう不要なんだからすぐに出ていってちょうだい」

ご主人様が了承済み？ そんなわけじゃないじゃないか！

そんな嘘、ボクには通用しないぞ。

演習に行く前だってフィーナのことをすごく心配してたんだから。

「せめて新しい方がいらしてから出ていくのでは、ダメですか？」

「しつこいわね、目障りだって言っているの。野蛮な獣と仲良くするしか能のないあなたなんか、王宮にいる資格はないのよ。さっさと出ていきなさい！」

王女様は語気を強めた。

この人はいつもそうだ。ボクたちやフィーナへの苛立ちを隠そうともしない。

何がそんなに気に入らないのだろう。

【嫌だよ！ フィーナを辞めさせるなんて許さないぞ】

【そうだそうだ！ 目障りなのは王女のほうだ！】

みんな言葉が伝わらないのいいことに、口々に反抗する。

けれどアンジュ王女はボクたちを睨みつけ、一番近くの檻の柵をガシャンツと殴りつけた。

「うるさいわね！ あなたたちだって私の力でどうとでもできるんだから！」

「……わかりました。ご命令に従います。私は出ていきますので彼らには何もしないでください」

フィーナはボクたちを守るように前に出ると、深く頭を下げる。

「はじめからそうしていればいいのよ」

従うという言葉に満足したのか、王女様はフンッと鼻を鳴らして獣舎から出ていった。張り詰めていた空気が緩み、みんなは肩を落とすフィーナに声をかける。

【出ていくなんて嘘だよ！】

【そうだよ、行かないでよ！】

「ごめんね。王女様からの命令は逆らえないから。新しい方も来てくれるようだし」

フィーナは、どんな魔獣とも会話できる力を持っている。

このことをご主人様は知っている。だけど、掃除婦にそんな能力があるなんて、とよく思わない騎士もいるかもしれないから他の人には黙っていた。

ボクもフィーナに声をかけた。

【本当に出ていくつもりなの？】

「うん……これから宿舎の荷物をまとめて、すぐに出ていくわ」

【せめてご主人様が帰ってくるまで待ったら？　ちゃんと話をしたほうがいいよ】

「心配してくれてありがとう。でも、グランディ様に迷惑はかけられないから」

フィーナは悲しそうに手に持っている^{ほうき}箒をギュッと握る。

ここを出ていきたくないのだろう。帰る場所だってないはずだ。

【あんな女の言うことなんて無視して、ここにいればいいじゃない。私たちにはあなたが必要よ】

「ありがとうミリ。でも、そういうわけにはいかないわ」

【フィーナ……本当に騎士たちに会わなくていいの？】

「ええ。テオ、こんな形で辞めてしまうこと、グランディ様たちには言わないでね。きっと心配するだろうし、責任を感じさせてしまっただけじゃないから」

王女様からこれまでどんなにひどいことをされても、魔獣のボクたちが騒いで^{さわ}大事にならないようにとフィーナは守ってくれていた。

ご主人様たちの迷惑になってはいけないからと、ずっと何も言わずに我慢していた。

その結果がこれだなんてあんまりだ。

「みんな、元気でね。演習に行った他の子たちにもよろしく。騎士様の言うことをよく聞いてね」残っている魔獣ひとりひとりを優しく撫でてから、フィーナは獣舎を出ていった。

【ねえテオ、早くグランディに知らせてきなさいよ。騎士たちのところへ行けるの、今はあんただけなんだから】

【できるならボクだってそうしたいよ。でも、今は飛べないからこうして留守番してるわけ……】
【何言ってるのよ。それでもA級魔獣グリフォンなの!!　その立派な羽は見せかけなの!!　本当にもう一生フィーナに会えなくなってもいいの!!】

フィーナに、一生会えない……？

『テオ、お疲れ様。ゆっくり休んでね』

『今日とっても活躍したんでしょ？　テオはすごいねえ』

『怪我したの？ 大丈夫、すぐによくなるよ』

フィーナはこの魔獣たちをすぐく大事にしてくれていたし、みんなと過ごせて幸せだと言っていた。

でも、たびたびアンジュ王女に嫌がらせを受けていた。

弱音を口にはしなかったけど、つらい思いをしてきたはずだ。

だからここを離れたほうがいいのかもしれないと、つい見送ってしまった。

だけど、優しい笑顔を、光を帯びる温かい手を、忘れることなんてできない。

それにみんなも、彼女が出ていってパニックになっている。

ボクが、行かないと！

足に繋がれていた鎖を引きちぎり、怪我のため休めていた羽を広げる。

まだ完全に治っていないけど、ちゃんと飛べそうだ。

【さすがテオ！ いってらっしゃい！】

ミリたちに見送られ、獣舎を飛び出す。

王宮の上空を舞った瞬間、守衛騎士たちが騒ぎ出した。すぐに高度を上げる。だれもボクを捕まえることなんてできない。

演習場所を知っているわけではないのに迷わず飛べるのは、使い魔は主の魔力を追うことができるから。

でも、本調子じゃないから思ったよりスピードが出ないな。

フィーナ、すぐに出ていくって言ったけど……どこに行くんだろう。

以前、「もう家には帰れない」と零していた。

【だったらずっとボクたちと一緒にいればいいよ】って話していたのに。

彼女は優しく素敵な女性だ。

でもそれだけじゃない。フィーナの持つ真の力は、ボクたちにとって特別なんだ。その力はご主人様も、彼女自身も知らない。

治癒魔法が使えない、出来損ないの聖女。王宮ではそう呼ばれていたけれど、本当は違う。

彼女は治癒魔法を使える。

人ではなく、魔獣に対してだけ効果を発揮するその力。

どんな傷も癒してしまう特別な魔法は、本人も知らないまま使っている。

無自覚のうちに使っているから、いつも癒してもらっていたわけではない。だけどそれでいいと思っていた。

バレてしまえばきつと危険に晒される。

負傷した魔獣を癒すために戦地に同行させられたり、魔獣を不正売買する悪い組織に狙われたりするかもしれない。

彼女を守るために、ボクたち魔獣は秘密にしようと決めていた。

でもこうなってしまつては、もう隠しておくべきじゃないのかも。

いや、でも、やっぱり言わないほうがいいのかな。

特別な力を持っているとわかったら、それこそフィーナは獣舎に帰ってこないかも。
それは……寂しい。

なんて言ってる場合じゃないっ！

痛む羽を最大限上下させ、スピードを上げる。

【フィーナが解雇されたって、早くご主人様に伝えなきゃ！】

第一章

アンジュ王女に解雇を言い渡された私、フィーナ・オルパスはすぐに宿舎に戻って荷物をまとめた。

あの子たちと離れるのはすごく寂しいけれど、王女様の命令に背くことなんてできない。

それに、この件はグランディ様も了承していると Saying いた。だったらもう、私には獣舎にいる資格はない。

名残惜しさを感じながらも王宮を出る。

これからどこに行こう。

もう、あの家には帰らないと決めている。

男爵である父の妾の子として生まれた私は、幼いころに母を亡くし、オルパス家に引き取られた。それからずっと本妻と姉に蔑まれながら生活してきた。

ひどい扱いを受けても父は見えて見ぬふり。

だから学園を卒業したら、家を出ることを決めていた。

まさか王宮で働くことになるとは思っていなかったけど。

でももう、あそこにも私の居場所はない。

そういえば、キュウは今どうしているだろう。

あの家にいたころの唯一の私の友達。

小さくて、可愛くて、甘えん坊だったキュウの隣が、私の居場所だった――

オルパス家に来てから、私はまるで動物のような扱いを受けていた。

出される食事はほとんどが残飯で、与えられた部屋は埃をかぶった狭い物置き。

義理の母と姉は、私に汚いものを見るような目を向けていた。

「本当あの女に似て卑しい子。この家の空気が悪くなるわ」

私がオルパス家に迷惑をかけていることは事実だから仕方がない。だけど、母を悪く言われるのは嫌だった。これまで父の援助などは受けずに、女手一つで育ててくれていたのに。

ある日、食事の残飯すらもらえなかった私は屋敷の裏の丘にあるクワの木の实でも食べようと外に出た。

するとどこからか動物の鳴き声が聞こえてきた。

キュウ、キュウと苦しそうだ。

声のするほうへ近づいていくと、木の根元に小さな羽の生えたフワフワの白い魔獣を見つけた。目を閉じて体を丸め、小さな声で鳴いている。

そっと抱き上げると【痛い、痛い】と言っているのがわかった。

よく見てみたけれど、怪我をしている様子はない。

私は小さな体を優しく撫でて「大丈夫だよ」と声をかけた。

するとゆっくりと目を開け、私をじっと見つめてくる。

潤んだ目を見開いた白い魔獣は、安心したように頬をこすりつけてきた。

可愛い……！

ギュッと抱きしめ、何度も撫でてあげた。

それからこの子をキュウと名付け、毎日会いに行った。

【フィーナあり、今日は遅かったね。寂しかった】

私の姿を見つけると、涙を浮かべながら一目散に胸に飛び込んでくるキュウ。

頬をすり寄せ、鼻で髪をかき分けるように頭を撫でてと甘えてくる。

「ごめんね。ちょっと片付けをしてて」

【片付け？】

「うん、花瓶が割れちゃってね……」

家の廊下を歩いていると、すれ違ったお義母さんに花瓶を投げつけられた。

私が視界に入ることさえ不快だそう。

割れた花瓶を片付けているときに切ってしまった指に視線を向ける。

「私ね、いらぬ子なの。だからお義母さんもお姉ちゃんも、私がいなくなればいいって思ってるんだ」

【いらぬ子だなんて、そんなはずないよ。フィーナは僕にとってかけがえのない存在だよ】

「ありがとう。私もキュウがとっても大切だよ」

キュウは怪我をした私の指をじっと見つめると、心配するように優しく舐めた。

優しく甘えん坊で、泣き虫なこの子が好きだった。
私を必要としてくれているのが嬉しくて、キュウがいるからどれだけ嬉しい思いをしても頑張れる。

けれど出会って六年が経ったところ、キュウの存在がお父さんにバレてしまった。

すぐに捨ててこないと刺し殺すと、剣を突きつけられた。

だから泣く泣く離れた。

見つかつて殺されないように、どこか遠くへ行きなさいと。

「ごめんね。私が弱いから、離れることでしかキュウを守ってあげられない……」

【謝らないで。離れていてもずっと一緒だよ。僕にはこの先も一生フイーナだけだよ】

涙を流す私を、キュウは小さな羽で優しく包み込んでくれた。

そして何度も何度も振り返りながら、彼は飛び立っていった。

悲しくて、寂しくて、つらい別れだったけれど、あの子がいたから私は魔獣が好きになった。

獣舎で、みんなと幸せな時間を過ごすことができた。

出来損ないで何もできない私を、好きだと言ってくれる魔獣たちにたくさん救われてきた。

キュウは元気にしているだろうか。どれくらい大きくなっているだろう。

——そうだ、捜しに行こう。

どこにいるかはまったくわからない。でも、時間はたくさんある。

お給金はほとんど使っていないからしばらく旅をするだけの余裕はあるし、何より私は魔獣たちが好きだ。

キュウを捜して旅をしながら、もっといろんな魔獣に出会ってみたい。

見たことのない魔獣と話をしてみたい。

それからたくさんのモフモフを撫でて、私の頬に鼻をすり寄せてくる魔獣たちをぎゅっと抱きしめて……。

なんて想像していると、次第に旅が楽しみになってきた。

グランディ様が「タイムしていないのに魔獣と会話ができるのは、稀なことだ」と言っていた。

だったら私はこの特別な力を使って、好きなことをして生きてみたい。

大好きな魔獣たちとたくさん出会って、そして私が彼らのためにできることを見つけたい。

そうと決まればどこから行こう……。

そうだ。たしか東隣のアルカ国には珍しい魔獣たちが集まると聞いたことがある。

なんでも、アルカ国でしか採れない魔獣の好きな果実があるのだとか。

キュウは食いしん坊だったし、そこにいる可能性もある。

私は東へ向かって歩き出した。



王都を出て、郊外の街からは乗合馬車でひたすら東へ乗り継ぐ。停まった街で小さな宿に泊まり、朝になるとまた馬車に乗って東を目指した。

何日もかけてエルドラード王国の最東にある村に着いたところで、馬車の運行は終わった。「ここからは歩いていかないとな」

こんなところまで来るのははじめてだ。

でも、この村から国境の森まではさほど遠くない。

私は足を進めた。

人気がない道をしばらく歩くと、森の入り口が見えてくる。

今まで安全な王都で暮らしてきて、深く考えずに旅をしようなんて出てきてしまったけど、王都から離れば離れるほど危険だという。

盗賊や人攫いが出たり、獐猛な魔物や魔獣に遭遇したり。

ここは王都にいるような、人に慣れた魔獣ばかりではないのだ。

幸い、馬車での旅は穏やかなものだった。

でもここからは違う。

今さら不安になるけれど、立ち止まってはられない。

何事ありませんようにと願いながら大きく息を吐き、私は森へ足を踏み入れた――

心配していたのが嘘だったかのように、森の中は穏やかだった。

時折そよぐ風が気持ちいい。

なんだか清々しい気分で歩いていると、少し離れたところから唸り声が聞こえてきた。

人の声ではない。魔獣か、魔物だ。

どちらもよく似た生き物で、その違いは主に生まれによる。

前者は自然に生息する獣が魔力と知性を持ったもの。

後者は魔王の魔力から発生し、繁殖したもの。本能から人や家畜を襲う恐ろしい生き物だ。

魔王が討伐されてから、魔物の数はずいぶん減ってきているものの、まだ殲滅はできていない。

「魔物じゃありませんように」

そう口にしながらかのするほうへ進んでいく。

怖いなら逃げればいいのにと自分でも思いつつ、苦しそうな唸り声を聞いて無視することができなかった。

木陰からそっと覗くと、そこには二本の立派な角を持つ、黄金の毛並みの天角鹿が横たわっている。大ききからしてまだ子どもだろう。

「よかった。魔獣だ」

いや、よくはないのか。あの子が獐猛じゃないとは限らない。でも怪我をしている子をあのまま

放っておくこともできない。

私はゆっくりと近づき、天角鹿の目をしっかりと見る。

【だれ!？」

「心配しないで。私はあなたを傷つけたりしないわ」

【人間なのに言葉がわかるの?】

「ええ。怪我をしてるんでしょ? 大丈夫?」

【罨にかかったんだ。必死に抜け出してここまで逃げてきたんだけど、もう動けない】

「そんな、ひどい」

つらそうにする天角鹿のそばへ行き、足の様子を見る。

有刺の足枷から抜け出したのだろう。何本もの引つ掻き傷があつて、出血している。

それに、足が歪んでいる。骨が折れているのかもしれない。

「痛いよね。ちよつと待つてね」

私は鞆から手巾を取り出し、怪我をしている足に巻く。

そしてそつと、優しく、足を撫でる。

獣舎にいるみんなはこうすると喜んでくれた。

フィーナの手は温かくて安心する、と。

この子も少しでも痛みが和らぐように、同じようにしてあげると……。

【もう痛くない!】

「え? もう治つたの? それはよかった」

魔獣の治癒力は人間よりもはるかに高い。

その都度差はあつたけれど、騎士団の魔獣たちも怪我の治りがすごく早いときがあつた。

この子は野生だし、そのぶん治癒力もあるのかな。

なんにせよ治つてよかった。

【ありがとう!】

「お礼を言われることなんてないよ」

頬をすり寄せてくる天角鹿の頭を撫でながら、やっぱり魔獣は可愛いなと頬を緩ませた。

「――今の、治癒魔法を使ったのか!？」

驚いたような声がして振り返ると、癖のある赤い髪をした、冒険者らしき男性が立っていた。

隣には真っ白な体躯と九つの尻尾を持つ、九尾狐の魔獣もいる。距離感からして彼の使い魔だろう。

うか。とても賢そうだ。

悪い人たちではなさそう。

それよりも、どうして治癒魔法を使つたと思われたのだろう。

だつて私は――

「治癒魔法は使えません」

いくら訓練しても、どれだけ努力しても、治癒魔法を使えなかったのだから。

【え? でも、魔法を使つてもらつたよ。だから治つたんだよ】

腕の中にいる天角鹿が私の頬を舐めながら、不思議そうにする。

「え？」

【「とつても温かい光の魔力だったよ。ありがとう」

温かい光の魔力……？

「ええ!? 私、治癒魔法を使ったの!」

自分で自分に驚いていると、赤髪の彼がハハッと笑いながらこちらに近づいてきた。

「俺は冒険者のゼンデ。あんたは？」

「私は……フィーナと言います」

軽い自己紹介をしたところで、怪我が治った天角鹿を見送り、少し彼と話をする事になった。

私は、自分の力について何も知らなかったから。

近くの木陰に、並んで腰を下ろす。

「自分でも知らずに治癒魔法を使ってるって、フィーナは変わってるな」

「私、光属性の魔力を持っていることはわかっていました。ただ、どれだけ訓練しても治癒魔法を使えずにいたのですが……まさか知らずに使っていたなんて」

「俺、さっきの怪我した天角鹿を見かけてさ。そのまま逃げていったから、手当てしようと追いかけてきたんだ。まさか魔獣に治癒魔法が使える人に出会うとはな」

最近魔獣を捕まえて不正に売買している組織がおり、その組織を捜す依頼を受けてこの森に来たのだそう。

その任務中に罠にかかった天角鹿を見つけ、今に至る。

「私も今とてもびっくりしています」

「それにさ、天角鹿と喋っていたら？ タイムしてない魔獣の言葉がわかるなんてすごいぜ」

「魔獣の言葉がわかるのは幼いころからで……これが特別な力だとは思っていませんでした」

グランディ様にあまり口外しないほうがいいと言われてはじめて、自分が特別な人と知った。

まあ、キュウと離れたあとは、魔獣と関わる機会なんて王宮で働き始めるまでほとんどなかったのだけ。

「ほんとフィーナは変わってるな!」

ハハハ、と笑うゼンデさんは、とても明るくて気さくな人だった。

「そちらの九尾狐はゼンデさんの使い魔ですか？」

「ああ。ランって言なんだ」

「ランさん、はじめまして。とてもいい毛並みをしていますね」

【「あら、ありがとう。あなたもとてもキュートよ」

キュートだなんて、なんだか照れる。ランさんは女の子だけど、とってもかっこいい。

「ゼンデさんはA級のティマーなんです」

「魔獣の等級がわかるのか。すごいな」

「はい。魔獣騎士団の獣舎で働いていたので、それなりに知識はあるんです」

ティマーのランクは、タイムしている魔獣の等級によって決まる。

九尾狐はA級の魔獣なので、ゼンデさんはA級ティマーということだ。ちなみに魔獣騎士団でA級ティマーなのは、グリフォンのテオを相棒にしているグランディ様だけ。それだけゼンデさんはすごいティマーということだ。

「エルドラードの魔獣騎士団か。立派なところで働いてたんだ。でも、魔獣を癒せるんだからそれもそうか」

「いえ、私は獣舎の掃除婦をしていただけです。それに、私は自分が治癒魔法を使えると思っていませんでしたし……」

やけに魔獣たちの傷の治りが早かったのは、私が無意識に魔法を使っていたから？

みんなはきつとわかっていたよね。

どうして何も教えてくれなかったのだろう。何か理由があったのかな。

すると、ゼンデさんが首を傾げた。

「待てよ。光属性の魔力があるってことは、フィーナって聖女だろ!? なんで掃除婦を？」

「先ほども言いましたが、私はどれだけ訓練を積んでも治癒魔法を使えなかったんです。それで、わけあつて掃除婦を……」

——すべては、適性のある仕事を知るために魔力診断を受けたことが始まりだった。



十八歳になって、学園を卒業する日が近づいてきた。

婚約者こんやくしゃもいなければ縁談えんだんが来ることもない私は就職して家を出ようと思い、適性のある仕事を知るために魔力診断を受けに来た。

すると……。

「光属性の魔力をお持ちですね。すぐに王宮に報告します！」

「え……私に光属性の魔力が!？」

光属性の魔力は、女性しか持てない希少な力で、唯一治癒魔法が使える。

その力を持つ者は国に帰属し、聖女として働くことが定められていた。

私、聖女として働くの？ そんな重要な仕事できるのかな。

でも決められているなら、やるしかない。

それに聖女となれば、王宮に住み込みで働ける。これならあの家を出られる。

家に帰って荷物をまとめ、私は卒業後すぐに王宮にやってきた。

はじめは新しい聖女がやってきたと歓迎されたが、それは一時の間だけだった。

私は光属性の魔力があるものの、治癒魔法がいつまで経っても使えなかったのだ。

『光属性の魔力がありながら治癒魔法が使えないなんて、ほんと出来損ないね』

『あなたみたいな人が私たちと同じ聖女を名乗らないで』

出来損ない。その通りすぎて何も言えなかった。

周りからの重圧、蔑むような態度に耐え、いつか治癒魔法が使えるようになると信じ、たくさん

努力した。

それでも、治癒魔法が使える気配すらない。

自信をなくし自分の存在価値を見失っていたとき、ふと見つけたのが魔獣騎士団の獣舎だった。中を覗いてみたら、騎士たちはもう仕事を終えたあとのようであれもない。

私はかつての親友だったキユウを思い出し、そっと足を踏み入れた。

【あら、可愛らしいお客さん】

最初に私に気づいたのは、オオカミの魔獣だった。

「勝手に入ってごめんなさい」

【あなた、言葉がわかるの？】

「はい。あの、私魔獣が好きで……近くに行ってもいいですか？」

【もちろんよ。私はミリ。むさ苦しいところだけど、ゆっくりしていくといいわ】

「私はフィーナと言います。お邪魔します」

優しく招き入れられ、ゆっくりと近づく。

綺麗な毛並みだな。触りたい……。

すると思っていたことがわかったのか、ミリは私の腰ほどまでの高さがある檻の柵の上に身を乗り出し頭を下げる。

私は両頬を手で包み込むようにモフモフと撫でた。

ミリは一切嫌がらず、好きなだけ撫でさせてくれる。

「気持ちいい。ありがとうございます」

とても癒される。沈んでいた気持ちが少し和らいだ。

【ミリだけずるいよ。ボクも撫でてほしい！】

隣の檻にいたグリフォンも身を乗り出し、大きな羽を広げる。

「とても立派な羽ですね」

【そうでしょそうでしょ！ 触ってもいいよ】

「ありがとうございます。では、遠慮なく——」

それ以来、私は頻繁に獣舎に足を運んだ。

聖女としての訓練はいつまで経ってもうまくいかず落ち込んでいた。それでも、魔獣たちが励ましてくれたおかげで頑張ろうと思えた。

けれど王宮に来て一年が経ったころ、私の聖女解任が決まった。

治癒魔法が使えないのだから仕方ないこと。

一年訓練しても使えず、見込みがないとして王宮を出ることになったのだ。

最後に獣舎のみんなに挨拶をして、宿舎で荷物をまとめていると、なぜか魔獣騎士団の団長室に呼ばれた。

もしかして、勝手に獣舎に入り浸っていたことがバレて咎められるのだろうか。

不安になりながら中へ入ると、騎士団の制服をまとった金髪碧眼の綺麗な男性が立っていた。

魔獣騎士団長のグランディ様だ。

背中の後ろで手を組んだ彼は、無表情で私を見る。

やっぱり怒られるのだろうか。

数秒、私をじっと見つめたあと、グランディ様が口を開く。

「フィーナ・オルパスさん、うちの獣舎で働かないか？」

「え……獣舎で、働く？」

「いったい、どういうことだろう。」

「テオが、君を引き止めると言ってきたかないんだ。他の魔獣たちも、君が去ると聞いてから暴れて手がつけれない。今は君を説得してくるからと言って、大人しくしてもらっているんだが……」

ため息交じりに告げる様子に、獣舎での対応の大変さがうかがい知れる。

「すみません……私が勝手にあの子たちと仲良くしていたせいで、騎士のみなさんにご迷惑をおかけしているんですね」

「いや、そういうわけではない。君が獣舎に来るようになってから魔獣たちも機嫌がよくて、我々も助かっていたんだ」

「私が獣舎に行っていたこと、ご存じだったんですか？」

「ああ。邪魔すると思いつて、声はかけなかったが」

私がみんなといるところを見られていたんだ。全然気がつかなかった。

獣舎には本当は騎士以外は入ってはいけないから、気づいたうえでそっとしてくれていたんだな。

「ですが私、獣舎で働くなんて……掃除くらいしかできません」

「掃除……いいではないか。それでいい」

「え？」

グランディ様いわく、魔獣たちに引き止めると言われてとりあえず働かないかと誘ったが、何をしてもらうか決めていなかったのだという。

そして私はその日から獣舎の掃除婦として、引き続き王宮内で働くことになった。

仕事は獣舎の掃除と魔獣たちの餌やりやブラッシング。

大きな体の子たちを相手にするので大変なときもあるけれど、やりがいのある仕事だった。

何よりみんな可愛くて、癒される。

騎士の方たちもとてもよくしてくれた。

——その一方で、悩んでいることもあった。

「うるさくて粗暴な魔獣たちね」

ときどき、獣舎にやってきては暴言を吐くアンジュ王女。

決まって騎士たちのいないときに来る王女は、なぜか魔獣をひどく嫌っていた。そして私のことも。

「彼らは騎士のみなさんと共に、この国を守ってくれているとても優秀な存在です。どうかそのようなことを言わないでください」

「聖女になり損ねたあなたが、ずいぶんと偉そうな口を叩くのね」

「私はなんと言われようとかまいません。ですが、彼らを侮辱するのはやめてください」
「いったい何が気に入らないというのだらう。そんなに嫌なら獣舎に来なければいいのに。」

「うるさいわね！ 私に口ごたえするなんてこういうことかわかっているの？ ここにいる野蠻な獣たちなんて、どうにでもできるんだから！」

アンジュ王女は近くにあった飼料のバケツを蹴り飛ばした。
なんてことを……。

でも、これ以上私が反抗すれば魔獣たちに悪い影響を与えてしまうかもしれない。

アンジュ王女の発言には納得いかないけれど、黙って耐えるしかなかった。

それから、獣舎の外に積んでいた寢床のための藁が荒らされたり、農家から届くはずだった野菜が届かなかったりという嫌がらせが続いた。

本当はやめてくださいと声をあげて怒りたい。

でも、できるだけ反感を買わないように、彼らにこれ以上敵意が向かないようにふるまうことでなんとか獣舎での生活を守ってきた。

けれどそれから三年が経った先日、アンジュ王女に解雇を言い渡された。

『出来損ないの聖女のくせに、グランディ様に取り入って王宮に居座るなんてみつともない』
その通りだ。私は治癒魔法が使えない出来損ない。

本来なら、たとえ掃除婦であろうと王宮で働く者はそれなりの身分がないといけない。

男爵家の妾の子にすぎない私が、いていい場所じゃないんだ。

王女様の言葉には、反論の余地がない。

私を雇ってくれたグランディ様も了承しているなら、もう出ていくしかない。

反抗して無理に残ったところで、またみんなに迷惑をかけてしまう。

魔獣たちと離れることはつらいが、仕方ない。

そう言い聞かせ、私は解雇を受け入れた――



時折眉をひそめながら、ゼンデさんは黙って話を聞いてくれた。

「――ですので、聖女として働くために王宮へ行きましたが、聖女にはなれなかったのです」

「なるほどな……フィーナは人間じゃなくて、魔獣たちの聖女だったんだな」

「魔獣たちの、聖女……」

私の魔力は人間ではなく、魔獣に使えるものだったんだ。

ずっと、苦しかった。光属性の魔力を持ちながら治癒魔法を使えないことが。

いったいなんのための魔力なのか。

私ではなく違う人が持っていたら、聖女として国のために尽くすことができたのに、と。

私はちゃんと、あの子たちの役に立っていたのかな。

知っていたらもつとできたことがあったのかもしれないけど、それはもう考えても仕方ない。あの子たちが教えてくれなかったのも、何か理由があるはずだし。

「フィーナはこれからどうするんだ？」

「旅に出ようと思っていたんです。昔友人だった魔獣のキュウを捜しながら、いろいろな魔獣たちと出会う旅を」

「いいじゃん。キュウってどんな魔獣？」

「私もあの子もまだ幼かったのでよくわからないのですが、小さな羽があつて、可愛い牙きばが生えた、白い魔獣です」

「小さな羽と牙か。翼犬ヨウケンとかかな？」

キュウは背中にフワフワの毛が生えていて、モフモフして気持ちよかった。そういえば、お腹なかには毛はなかったな……。

つてことは、全身にモフモフした毛が生えている翼犬ではないのかな。

「わかりませんが、会えばわかると思います」

「そっか！ 見つかるといいな」

「はい。ありがとうございます」

キュウが今、どんな姿になっているかは想像がつかない。

でも、顔を合わせればわかる。そう確信している。

「このあとはどこに行くつもりなんだ？」

「森を抜けてアルカ国に入ろうと思っていたところなんです。しばらくキュウを捜しながら滞在しようかと」

「なら、一緒に行こうぜ。俺もこれからアルカ国に戻るから」

「いいのですか？ それは嬉しいです」

さつきは可愛い天角鹿の子もだったけれど、この先魔物と遭遇するかもしれないし、危険な目に遭あわないとも限らない。

A級テイマーであり、冒険者としても腕が立つゼンデさんが一緒なら心強い。

「しばらく滞在するなら、街も案内するよ。俺も少し休みがあるから」

「本当ですか？ ありがとうございます。ランさんもよろしくお願いします」

【こちらこそ。女の子がいると華はながあつていいわあ】

「ラン、それはどういうことだよ」

二人のやり取りを微笑ほほえましく思いながら、私たちはアルカ国に向かって歩き出した。

「ゼンデさん。先ほど言っていた魔獣を不正売買している組織とは、どういった組織なんですか？」

「それがまだ不明なんだ。今のところわかつているのは、魔獣を手荒く捕まえては高値で商人に売りつけたり、見世物にして稼かせいだりしている連中ってくらいだな」

「ひどい……」

魔獣をまるで物のように、商売道具として扱っているなんてひどすぎる。

たしかに主人を亡くし、行き場のなくなった魔獣たちの新しい飼かい主ぬしを探すという目的で、売買

を行う仕組みもある。

でも、野生に生きている魔獣を無理やり捕まえて売るなんて、許せない。

私がそう言っていると、ゼンデさんも頷いた。

「商売をしている連中と魔獣を捕獲する密猟団は違って、前者をどれだけ取り締まっても、犯罪はなくなるらない」

「だから、早く密猟団を捕まえないといけないのですね」

「ああ。でも、なかなか足取りが掴めないんだ」

今回は、この森に仕掛けられていた罠の場所、数、狙われている魔獣などを報告するために戻るのだそう。

他の冒険者たちも集めている情報をもとに、密猟団の行動パターンなどをまとめ、また任務に向かう。

次の指令が出るまでは、アルカ国で待機なのだそうだ。

「私にできること、何かありませんか？ なんでも協力します」

「手伝ってくれるのか？」

「もちろんです。お役に立てればいいのですが……」

「助かるよ。だったら、一緒に来てほしい場所があるんだ」

アルカ国でキュウを捜すといってもなんの手がかりもない。

むやみにただ捜すより、私にできることをしながら捜すほうがいい。

それに、魔獣たちが危険に晒されているのに放っておけない。

「わかりました」

「ありがとう。とりあえず、そろそろ暗くなるから今日はこら辺で野営だな」

「野営……そうですね。はじめてですが、頑張ります！」

「そんなに張り切らなくても大丈夫だから」

でも、野営って大変なんじゃないだろうか。

薪や枯れ葉を集めて火をおこしたり、食料を調達したり。

そう思っていたら「座っていて」と言われ、促されるまま大きく露出している木の根に腰かける。

ゼンデさんは近くに落ちている木の枝を適当に集め、手をかざす。

すると小さな炎が出現し、あつという間に火がついた。

「すごい……火の魔法だ」

「俺は火属性の魔力を持ってるんだ。けっこう便利だぜ」

魔力は主に、火、風、水、土の属性があり、稀に私のような光属性の魔力を持つ者もいる。

これは魔獣も同様で、ランさんもゼンデさんと同じ火属性の魔力を持っているそうだ。

そこに、いつの間にかいなくなっていたランさんが、魚を三匹啜えて戻ってきた。

【血抜きもしいたわよ】

「ラン、今日はサービスがいいじゃん」

【女の子がいるんだから当たり前よ】



ゼンデさんは魚を手際よく木の枝に刺し、焼き始める。

「お二人とも、何から何までありがとうございます」

焼けた魚はしっかりと血抜きをしてくれていたおかげで生臭さはなく、とても美味しかった。食べたあと、すぐにゼンデさんは木の根を枕に寝転ぶ。

こうやって寝るんだ。硬^{かた}そうだけど、仕方ないよね。

私も木の根を枕にして寝転ぼうとしたが、その瞬間フワフワで温かいものに包まれた。

【そんなところで寝たら体を痛めるわよ】

「ランさん……背をお借りしてしまつて、いいのですか？」

【もちろんよ。私もフィーナといくと癒されるの】

「ありがとうございます」

そのままランさんのモフモフの体に身を預ける。

「明日の昼くらいには森を抜けられる。そしたらすぐアルカの街がある」

「そうなのですね。エルドラード以外の国ははじめてなので、少しドキドキします」

「うまいもんもいっぱいあるし、活気があっていいところだから」

「それは楽しみです」

「ああ。じゃあ寝ようぜ」

「はい、おやすみなさい」

王都を出てからずっとただ国境の森を目指す移動の旅だったけれど、今日はいろいろなことが

あつたな。

怪我をした天角鹿と遭遇して、私が治癒魔法を使えることがわかって、ゼンデさんとランさんに会った。

解雇された勢いで旅に出てしまったけど、いい人たちに出会えてよかった。

私は温かなモフモフに安心しながら、ゆっくりと目を閉じた。



あ！ あそこが演習場だ。やっとついた。

どのくらい飛んだかな？ 思ったよりも時間がかかってしまった。

でも、ご主人様の魔力の気配が強くなっている。

よく見てみると、訓練は一段落した様子で騎士たちは休憩しているところみたい。

まだ少し先だけど、ボクは目がいいからみんなが何をしているかわかるんだ。

スピードを上げて演習場まで急ぐ。

さらに近づくとご主人様が気がついたみたいで、こっちに駆け寄ってくる。

ボクは急降下し、ピタッと目の前に着地した。

「テオ、いったいどうしたんだ？ 怪我が完全に治るまで飛んではいけないと言っただろう」

【それどころじゃないよ！ フィーナが獣舎を出ていったんだ！】

「何!? どういうことだ?」

【いきなりアンジュ王女が獣舎にやってきて、フィーナを解雇したんだよ。グランディ様も了承済みだ、なんて言ってたよ!】

「俺が了承済みだと!? そんなわけないじゃないか!」

【わかってるよ。でも、フィーナはご主人様に迷惑はかけられないから出ていったよ】
焦りをあらわにするご主人様。やっぱり了承したっていうのは何かの間違いだったんだ。

訓練に参加していた他の騎士と魔獣たちも集まってくる。

ボクの話聞いて、魔獣たちは騒ぎ出した。

【フィーナが出ていったってどういうこと!?】

【そんな話、聞いてないよ!】

【テオ! なんて引き止めなかったんだよ!】

演習場はパニック状態だ。

「全員落ち着け! ここで騒いでもフィーナは戻ってこないぞ!」

ボク以外の魔獣の言葉はわからないはずなのに、ご主人様はみんなの言っていることがわかってるみたいだ。

まあ、この話の内容で騒ぐ理由なんて一つしかないけど。

【とにかく、早く帰らないと】

「そうしたいところだが……」

まだ演習が終わっていないから、渋^{しぶ}っているんだろう。

責任感が強いから、途中で抜け出すことをためらっているんだ。

「何やってるの。早く行きなさいよ」

そう声をかけてきたのは、副団長のミラーナさん。

魔獣騎士団唯一の女性騎士で、フィーナととっても仲良しだ。

「ミラーナ……いいのか？」

「いい何も、使い魔のテオが怪我してるから今回は不参加でいいって言ったのに、無理に来たのはグランディでしょ。残っていたらこんなことにはならなかったのに。タイミングの悪い男ね」

「それは、団長としての責務を果たそうと——」

「いいから早く行きなさいよ。フィーナを連れ戻してこなかったら許さないからね」

ミラーナさんがご主人様の背中を押す。

その手に決心がついたのか小さく頷くと、ボクの背中に飛び乗った。

【超スピードで行くよ】

「ああ、頼んだぞ。テオ」

大きく羽を広げ、すぐに出発する。

【このままフィーナのところまで飛ぶ？ 王都にいるなら、魔力の匂いでだいたいの場所はわかると思う】

「いや、いったん王宮に帰ろう。アンジュ王女が囁^{ささ}んでいるなら連れ戻したところでまた同じこと

になる」

【王女様を説得するんだね】

「説得でどうにかなればいいがな」

本当は今すぐにでもフィーナのところへ行きたいと思っているはず。

だってご主人様は、彼女がとっても好きだから。

でも、感情のままに行動しないところがご主人様のいいところだ。

フィーナがまだ聖女として訓練をしていたころ、こっそり獣舎に来てボクたちと過ごしていたときも、話しかけたいのを我慢してじっと見ていた。

きつと、声をかけたらフィーナはもう来なくなるとわかっていたんだ。

……待つて、それってただのヘタレってことかな？

まあ、そのおかげで掃除婦として獣舎で働いてくれることになったから、よしとしよう。

——もうすぐ王宮に着くというとき、違和感を覚えた。

【え……あれ？ おかしいな。フィーナの魔力の匂いがしない】

「どういうことだ？」

フィーナの魔力は特別だから、多少離れていても感じ取れていたのに。

【もしかしたら、王都を出ていったのかも】

「どうして……どこか当てでもあるんだろうか」

家には帰らないだろうと思っただけ、まさか行く当てもなく王都を出るなんて思わなかった。こんなことなら無理にでも引き止めたらよかったかな。

【とにかく、早く戻ろう】

「そうだな」

一人で飛ぶよりも、ご主人様がいるほうが速く飛べる。

それは、主と使い魔でお互いの魔力を高め合えるから。

行きよりもずいぶん速いスピードで帰ってくる事ができた。

まずは獣舎に戻る。

【あ！ 帰ってきた！】

【テオ！ フィーナは？】

彼女が出ていってすぐのときよりも落ち着いてはいるけれど、みんなまだソワソワしている。

【まだフィーナのところには行っていないよ！ ところで新しい掃除婦さんは来たの？】

【そんなのここに来た瞬間、悲鳴をあげて逃げていったわよ】

【どうせミリが威嚇したんでしょ】

【失礼ね。挨拶がてらちよつと吠えただけよ】

魔獣であるミリは、オオカミといえど人を背に乗せられるほど大きい。

こんな大きなオオカミに吠えられたら、普通の人は逃げ出すに決まっている。

でも、王女様が連れてきた新しい掃除婦なんていなくていい。

「みんな、そんな様子だとフィーナが心配する。俺がなんとかするからいつも通りでいてくれ」
ご主人様の声がけで魔獣たちが静かになる。

不安そうにはしているものの、今騒いでもどうにもならないとわかったのだろう。

【これからボクたちでアンジュ王女のところへ行ってくるからね】

この時間、きつと王女様は中庭でアフタヌーンティーを楽しんでいるはず。

広大な敷地の王宮内、獣舎から王族が生活している東殿の中庭までは少し離れている。

ボクはまたご主人様を背中に乗せ、ゆっくり飛び立つ。

「テオ、王女はフィーナに言っていた？」

【出来損ないの聖女のくせにグランディ様に取り入って王宮に居座るなんて、みっともないって】

【出来損ないだなんて……そんなわけないじゃないか！】

【そうだよ！ フィーナは唯一無二の存在だよ】

でも、ボクたちが彼女の力を黙っていたせいでこんなことになったのかもしれない。

フィーナは特別なんだとちゃんと saying いたなら……。

「テオのせいじゃないからな」

【ご主人様……】

何も言っていないのに、どうしてこんなにボクの気持ちを知ってくれるんだ。

本当にいいご主人様だ。

東殿の建物を飛び越え、中庭の上空に入る。

いた。アンジュ王女はガゼボの中で優雅^{ゆうが}にお茶を飲んでいる。
ボクは少し離れたところで着地した。

降りたご主人様が、ゆっくりと王女様に近づいていく。

「アンジュ王女、お話があるのですが」

「あら、グランディ様？ どうされたの？ 今は演習に行っているはずじゃなくて？もしかして私に会いたくて早く帰ってきたのかしら？」

「なぜ、フィーナを解雇したのですか。彼女は我々にとって必要な人です」

すると王女様が顔をしかめる。

「そんなことのためにわざわざいらしたの？ あなたも言っていたでしょ、新しい掃除婦を雇ってもいいと」

「違います！ それは、フィーナを解雇するという意味ではありません！」

そうだそうだ！

なりゆきで掃除婦になったフィーナは、掃除、餌やり、ブラッシング、買い出しにボクたちの相手まで全部一人でやっていた。

負担を減らすために新しく人を入れたほうがいいのかもつていう、ご主人様の気遣いなんだ！

それに王女様が連れてくる人は雇うつもりなんてないつて言ってたよ！

現にすぐに逃げ出しちゃったしね！

「まだ人手が必要ならまた私が連れてくるわよ？」

「結構です。我々はフィーナを必要としています。彼女を連れ戻し、もう一度雇います」

「グランディ様がそこまで言うならどうぞお好きなように。あの女が生きていればの話だけれど」

「生きていたらつて……いったいどういうことですか!？」

「ほら、帰る家はないつて言っていたでしょ？ どこかで野垂れ死^{のた}んでいてもおかしくはないつてことよ」

不敵な笑みを浮かべるアンジュ王女。

なんだか、嫌な感じがする。

「とにかく好きにしているのなら、そうさせていただきます。これ以上は魔獣騎士団のことに口を出さないでください」

またご主人様を背中に乗せ、獣舎へ戻る。

【今から捜しに行くの？】

「むやみに捜すのはよくない。まず王都を出てどこに向かったか調べないと」

たしかにその通りだ。でも、すごく心配だ。

フィーナ、どこに行ったの？

危ない目に遭っていないといいけど――

第二章

国境の森を抜けると、すぐに大きな国境門が姿を現した。

ゼンデさんは手際よく門衛に冒険者証を見せている。

そうだ、国境門を通って国に入るときは、冒険者証や自国で発行してもらった入国証など何かしらの証明書がいるんだった。

「あの、すみません。私、証明書を持っていなくて……」

違う国に入るのなら入国証がいるのは当たり前なのに、そんなことも考えずに旅に出たなんて恥ずかしい。

「ああ、大丈夫。俺の連れつてことにするから！」

ゼンデさんが門衛に何か言っていると、そのまま私も中へ入れてもらえた。

「ありがとうございます」

「出るときは何もいらないから忘れるよなあ」

なんでもないことのように笑ってくれるゼンデさんは本当にいい人だ。

出国するときに行きたい国の入国証を発行してもらわなければいけないが、出るときには何も必要ないため忘れる人もよくいるのだそう。

「アルカ国を出てまた違う国へ行くときは、一度エルドラードに戻らなければいけませんね……」

「それならさ、ここで冒険者登録すればいいよ。登録証があればどの国にも入れるから」

「ですが私、ただ旅をするだけなのに冒険者になるなんて」

「依頼は自分で決められるから、別に何もしなくたっていいんだ。たまたま薬草を見つけた、たまたま魔物を倒したつてときに登録してると、それに応じた報奨金^{ほうしょうきん}がもらえるから便利だぜ」

たまたま魔物を倒すなんてそうないだろうけど、依頼を気にしないでいいのなら登録しておいてもいいかも。

「わかりました。そうしてみます」

「オッケー。あとでギルドも案内するよ」

「ありがとうございます」

とりあえずお腹が減っているの、まずは街へ行つてご飯を食べることにした。

もう昼すぎだが、朝ごはんとして森でピーチアの実を食べただけだ。甘くて瑞々^{みずみず}しい実は美味しかったけれど、やっぱり腹持ちはしない。

牧場などがあるのどかな草原を抜け、街に入る。

すると、活気に溢^{あふ}れた街並みに驚いた。

先が見えないほど続く露店^{ろくてん}が並ぶストリートに、いろいろな国から来たであろう人たちが。

それに、魔獣たちもたくさん歩いている。

「すごく賑^{にぎ}やかなところですね」

エルドラードでは、王都の中心街は特別な理由を除き、使い魔であっても店まで魔獣が同行することはできない。

貴族が多く暮らしているので、高価なものを扱っているお店が多いからだとか、魔獣同士でトラブルになるといけないからだとか、理由はいろいろある。

「まあ、よくも悪くも自由な国なんだ」

「楽しそうではないところですね。それに、とても美味しそうな匂いもします！」

「珍しい食べ物もいっぱいあるぜ」

私たちは露店があるストリートに入り、何を食べようか見て回る。

「どれも美味しそうで迷います。おすすめとありますか？」

「そうだな、ガッツリいきたいならホッグオークの肉とかどうだ？」

「ホッグオーク!？」

「ちよつと硬いけど、噛めば噛むほど旨味が出るんだ」

魔物の肉なんて食べたことないや。

でも、少し興味がある。

「では、それにします」

「お、いいね！」

私たちはホッグオークの串焼くじやきを買い、近くのベンチに座る。

ゼンデさんはランさんの分も買って、串から外して足元に置いた。

三人で一緒に肉を頬張る。

「美味しいです。歯ごたえがあってジューシーで、旨味がしっかりあって」

「よかった。すすめたものの、もう少し上品なものにすればいいかと思ってたんだ」

【そりやそうよ。魔物の肉をすすめるなんて女心がわかってないんだから】

「とんでもないです。はじめて魔物の肉を食べましたが、思っていたより臭くさみもなく美味しいです」

【いい子ねえ。今度おしゃれなスイーツ屋があるから一緒に行きましょう】

「スイーツ!? 嬉しいですよ! すごく楽しみですっ!」

「フィーナ、さつきと反応が全然違うじゃねえか……」

談笑しながら食べる魔物の肉は、本当にいい味がした。

ランさんおすすめのスイーツも楽しんだ。

お肉を食べて腹ごしらえをしたあとは、冒険者登録をするためにギルドへ行くことにした。

アルカ国は東大陸の中央にある国なので、冒険者がたくさん集まってくるらしい。

ゼンデさんに連れられてやって来たギルドは、もうすぐ日が暮れようかという時間なのに大勢の冒険者で賑にぎわっている。

たくさんの紙が貼られた木板を見ながら、この依頼は危険だとか、こっちは割に合わないだとか話している人たち。

魔物の角らしいものを持って受付のお姉さんと交渉している人。
見たことのない空間に、入り口の前から動けない。

「登録ならこっちのカウンターだ」

「あ、はい……」

圧倒されながら、ゼンデさんについていく。

一人だったら気圧されて、絶対に何もできずに出ていったな……。

「冒険者登録したいんだけど」

「では、こちらにご記入お願いします」

ゼンデさんが受付のお姉さんに声をかけてくれたので、私は渡された書類に必要事項を書いていく。

名前に、年齢、出生国に……

「役、職？」

「はい。冒険者として活動する際の役職です。決まっていなければ、希望する職を書いてくだされば大丈夫ですよ。あとで変更もできますし」

「そう、ですか……」

希望と言われても、私に何ができるのかわからない。

「剣士とか魔法使いとか弓使い、ヒーラー。なんでも好きなもの書いておけばいいんじゃないか？」

「好きなものといっても何も……」

きっと魔力的にはヒーラーになるのだろうけど、人を治癒できないヒーラーなんて意味がない。

「よかつたら適性検査受けてみますか？」

適性検査は一度受けていて、光属性の魔力があることはわかっている。

そのことを伝えると、このギルドの検査機は魔力の属性でなく、総合的に向いている役職を鑑定してくれるという。せっかくなので、受けてみることにした。

受付のお姉さんが持ってきた透明な水晶に手をかざし、少し魔力を流し込む。

すると、水晶が白銀色に光り輝いた。

「ティマーの素質がありますね！」

「私が、ティマー……」

「おお！ やっぱりそうじゃないかと思っただぜ！」

【あなたは調子がいいと言わないの】

魔獣と共に行動し、戦うティマー。

たしかに魔獣は好きだし、彼らの言葉がわかるという点では向いているのかもしれない。

でも、難しいところはティム契約を結んでくれる魔獣と出会えるかということ。

私、ティマーになれるだろうか。

「というか、もうすでにティムしている魔獣がいるのでは？」

「……」

受付のお姉さんの言葉に、私もゼンデさんも声をあげて固まった。